

## 《今はむかし - その2》

東日本大震災から 10 年が経過します。10 年前の平成 23 年 3 月、福島沖から遠く離れた村上市でも長い時間、大きな横揺れを感じました。その年、多くの催し物は中止となり、その年の 4 月、私は異動となりました。お世話になった皆さんとの歓送迎会も中止となり、世の中すべてが自粛の年であったように思います。そんな中、ひとつの作文と出会いました。それは、全国老協で毎年夏から秋にかけて実施している「笑顔をありがとう～介護作文フォトコンテスト」で、介護士にまつわる一コマを取り上げたものでした。このたび、全国老協の承諾をいただき、その当時の作文について、皆さんに紹介したいと思います。

公益社団法人 全国老人福祉施設協議会

第 4 回（平成 23 年）～笑顔をありがとう～介護作文フォトコンテスト（今、この瞬間を生きる）

最優秀賞

「親愛なる介護士へ（名取より愛を込めて）」

（特養）ユートピアつくも 迫田栄子さん（名古屋市）

初秋の頃、その後皆様（職員）いかがお過ごしでしょうか。名取ボランティアに来て五日目になりました。名取市内は、やっとがれきの山が片付いて、静かな街並みが戻ってきつつあるとの事。でも、震災から半年たってもまだ至る所に、片付いていない場所があり、改めて、津波の恐ろしさを身近に感じています。昼夜を問わず、余震が発生している日常です。私達が担当するのは、震災で、今まで過ごしていた老人ホームが流され、財産も家族も全て無くされた方々のケアです。生活の場は、養護老人ホームに併設されているリハビリセンター内に、固い段ボールで仕切られただけの居室で生活されています。狭く、プライバシーの保護のない生活環境の中でも、皆さん（七名の方）務めて明るく生活されています。御一人の居室が二メートル×二・五メートルの広さでしょうか。ベットとタンスを置けば、それで一杯の居室なのです。お茶の時間に、一人のばっちゃん（おばあさん）から震災当時の三月十一日の出来事を聞きました。地震が来た時、施設の職員が「すぐ逃げる。足が悪いから車に乗れ。」と言って、ばっちゃんは車の中に押し込まれたそうです。避難場所に向かっている車の中で、後ろを振り返ると、その職員は、目を充血させ、真青な顔をして、大きく手を振っていたそうです。その数分後、あの大津波が来て老人ホームが跡形もなく流されてしまい、津波が引いた後は、何も残されていなかったとか。その職員は、一番に自分（ばっちゃん）を愛してくれていたし、ばっちゃんも一番好きだった。老人ホームと一緒に流されてしまった。職員は三人の子供がいた。津波さえ来なければ…。震災の出来事を淡々とお話されて、私の方が涙が出てくる時もありますが、皆さん、これは「自分の運命」と思っているのでしょうか、淡々と、そして静かにお話されるのです。家族も財産も思い出も失くしてしまわれたのに…。一日一日無事に過ごせる事に感謝していると聞かれていました。私は、ここで今まで経験した事がない環境の中で、短い期間ですが、少しでも皆さん（七名）の笑顔が出るようにケアしていきたいと思います。日々の業務に追われて、介護の基本を見失いがちですが、「入所者の声に耳を傾ける」ことを忘れずにケアしていきましょう。 九月十五日 夜勤にて 迫田

※この手紙は、九月十日～九月二十一日の期間に災害ボランティアとして名取市にある養護老人ホームでお世話になっている時、名古屋市の介護職員に宛てた手紙です。